

令和 2 年 5 月 28 日現在

機関番号：15301
研究種目：基盤研究(C) (一般)
研究期間：2015～2019
課題番号：15K11791
研究課題名(和文) 早期退院を目指した精神科急性期病棟へのリカバリーとパートナーシップモデルの適用

研究課題名(英文) Application of the recovery - partnership model that aims to early discharge from acute care units in psychiatric hospitals

研究代表者
岡本 亜紀 (Okamoto, Aki)

岡山大学・保健学研究科・講師

研究者番号：10413527
交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：主観的、個人的観点からの意義ある生活と社会の中で生活している感覚を見出すというリカバリーの概念について、日本の病院で働く精神科看護師の理解を促進させる体験プログラムを実施、評価する研究を行った。本プログラムにより、病院で働く看護師のリカバリー志向は有意に上昇した。また、包括型地域生活支援(Assertive Community Treatment:ACT)の支援体験から得られたカテゴリーには、複数のリカバリーの概念が読み取れた、さらに、病院での看護援助の限界に気づく効果があった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

重度の精神障害を持つ人の自分らしく意義ある生活を目指すリカバリーを理解するため、病院看護師を対象とした体験プログラムを実施し、定量的かつ定性的に評価した研究はこれまでない。この点における本研究の意義を強調したい。看護師がリカバリーに関する概念的理解を促進し、リカバリーを目標とした実践を具体化できたならば、医学モデルに偏りがちな病院の中で“Strengths-Based”な視点で日常的看護援助を実践していくことに寄与する。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to implement an experience-based program to promote the understanding of the concept of recovery, which is defined as a meaningful life and valued sense of integrity based on subjective and individual viewpoints, among psychiatric nurses working in hospitals in Japan and to evaluate this program. The results indicated recovery orientation significantly increased in the participants, revealed multiple instances of the concept of recovery in categories obtained from participant Assertive Community Treatment support experiences, helped nurses to realize the current limitations of nursing support in hospitals that tend to rely on the medical care model.

研究分野：精神看護学

キーワード：リカバリー 精神障害 包括型地域生活支援プログラム 病院看護師 ACT

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

精神の病気や障害のある人の社会復帰にはリカバリーが重要とされている。リカバリーとは内面的な変化のことであり、対等な関係、信頼関係、協力関係(パートナーシップ)を基盤にかけがえない命を生き、社会に生活し、再起して、自分の人生を歩むことを言う。近年、精神医療福祉分野では、病気をもちながらリカバリーを目指す実践スキルやリカバリー促進プログラムなどのリカバリー支援の具体的実践がある。これらは地域で暮らす人の社会生活の維持と質の向上に貢献している。精神科病棟での急性期医療においてもリカバリー支援の必要性が示唆されているが、入院医療では薬物療法が中心であり、社会から隔離され非日常的となりやすい病院は、リカバリーが起こりにくい環境である。入院が長期化すると患者は無関心や無気力、思考力や意欲の低下を引き起こし、日常生活力や対人関係力が弱まっていく。精神科病棟の急性期医療において、病棟看護師の考えや姿勢、態度をリカバリー志向に転換し、パートナーシップ形成の具体的方法に取り組むことで、精神科病棟におけるリカバリーの適用性の解明を研究し、入院患者がリカバリーを維持でき早期退院を可能とする精神科病院の環境づくりが重要となる。

2. 研究の目的

精神科病棟の急性期医療における看護師のリカバリー志向を高め、パートナーシップ形成を促進させる体験プログラムの開発と適用化を目指す。

3. 研究の方法

(1) 本研究は評価研究モデルとし、特定のプログラムがどの程度うまく遂行されているかを、定量的かつ定性的に行った。定量的には、リカバリー志向の測定尺度を指標としたプログラム前後の対象内比較分析を、定性的には、研究参加者のプログラム体験を可能な限りありのままに記述することを重視する、現象や出来事を包括的に要約する質的記述的研究を行った。

(2) 本研究における精神障害からのリカバリーとは、「主観的そして個人的な観点からの意義ある生活と社会の中で生活している感覚を見出すこと、また、新たな自分に変化する過程」とした。体験とは、「感じたり考えたり思ったりしたこと」とした。

(3) 本研究のプログラムの概要を述べる。体験プログラムの目標は、精神障害を持つ人のリカバリーについて、病院で働く精神科の看護師の理解を促進させることである。プログラムの構成と実施には、2005年と2009年より活動実績がある2つのACT専門機関に協力を得た。この2つのACTは、客観的指標によるACT機能の認定を受けており、M-GTAを用いた先行研究により、医学モデルではなく、ストレンクス視点を重視したリカバリー志向の実践スキルの質が証明されている(三品, 2013)。

表. リカバリー概念を理解するための体験プログラムの概要

期間	形式	時間	内容
1日目	講義 グループワーク	90分	家族の捉え方と家族の特性の理解、家族支援の再考について。事例を用いた家族の心の傷・回復と影響を明確にし、援助仮説を立て目標を明確化する。
	講義	90分	リカバリーの考え方、アウトリーチ・コミュニティケア、ACTの特徴・歴史・要素・効果・課題など、民間医療機関(内部完結型)のACT実践の支援の目標と具体的支援の内容などについて学習する。
	調査報告	30分	ACTを利用する家族の思いについて、インタビュー調査で語られた内容の発表を聞く。
2日目	見学実習	540分	ACTの一日体験として、訪問前のチームミーティングに参加した後、スタッフによる利用者への訪問支援に同行し、実習の終了後にスタッフからフィードバックを受ける。
	グループワーク	120分	見学実習を終えての体験発表、臨床事例におけるグループワーク、質疑応答。
3日目	講義	90分	病院と地域の連携、地域生活支援の基本と要素(ケースマネジメント、リカバリーとストレンクス、アウトリーチ、多職種チーム、ソーシャルインクルージョン)、精神保健福祉センターの支援体制、公的機関(ネットワーク型)のACT実践の支援の目標と具体的支援の内容、課題などについて学習する。

(4) 定量的評価方法は、リカバリー志向測定尺度 Recovery Knowledge Inventory: RKI(千葉, 宮本, 山口, 2012), 7-item Recovery Attitudes Questionnaire: RAQ-7(千葉, 梅田, 宮本他, 2012)を用いたプログラム前後の対象内比較分析を行った。参加者のリカバリーの概念の理解は、プログラム1日目の開始時に1回、3日目の終了時に1回の合計2回測定した。分析は、Wilcoxon 検

定による対象内比較とし、有意水準は5%とした。検定には統計ソフト SPSSver.18 を使用した。

(5) 見学実習の体験の記述を用いた質的記述的研究について述べる。データ収集には、参加者が ACT スタッフの訪問全てに一日同行訪問した後、各自 B5 サイズ用紙 1 枚に、「ACT の一日体験でさらにリカバリーを理解する」体験について自由記述の感想を求めた。この記述を生データとした。分析の手順は、まず、生データを熟読し、ACT 利用者に対するスタッフの言動に参加者が感じたり、考えたり、思ったりした部分を、参加者が記述した言葉のまま抜き出した。抜き出した記述部分の文脈の意味をそこなわないように、かつ主語や目的語などを補いながら、意味内容が明瞭になるように簡潔に書き表しコード化した。次に、書き表したコードが同類であるものを、生データにある文脈の意味をそこなわないように相違点、類似点によりひとまとまりにした後、できるだけ参加者の言葉を用いてカテゴリー化していった。分析の信用性の確保には、コード化の抽出とカテゴリー名の決定まで共同研究者と何度も話し合い、解釈が一致するまでディスカッションを重ねた。さらに、2 つの ACT 専門機関の保健師 2 名にカテゴリーについて説明し、「この分析結果は、あなた自身や同僚が、ACT 利用者と家族に対して日々行っていることを思い起こしたときに、ACT における支援として納得できますか」と確認したところ、同意が得られた。

(6) 岡山大学大学院保健学研究科看護学分野倫理審査会の承認を受けて実施した。

4. 研究成果

(1) プログラム前後の日本語版 RKI および RAQ-7 の変化について述べる。RKI 平均値は、プログラム前 3.41 点 (SD0.28)、プログラム後 3.69 点 (SD0.24) で、有意な差異があった ($p = .004$)。RAQ-7 平均値は、プログラム前 28.00 点 (SD3.81)、プログラム後 27.22 点 (SD3.38) で、有意な差異はなかった。

(2) 見学実習の体験から得られたカテゴリーについて述べる。ACT スタッフの訪問全てに同行訪問し、支援の実際の見学や一部を実施した「ACT の一日体験でさらにリカバリーを理解する」体験から、35 のコードが抽出され、7 のサブカテゴリーと 4 のカテゴリーが得られた。

表. 見学実習の体験から得られたカテゴリー

カテゴリー	サブカテゴリー
服薬拒否でどんなに精神症状が悪くても地域・家庭で生活するためのニーズに寄り添い続ける	未治療 (服薬拒否) でこんなに症状が悪そうな人でも、ACT が関わることで、地域・家庭で生活できている 地域生活につながる本人の根底にあるどんなスタイルやニーズにも寄り添い続ける
本来いる場で本来あるべき姿のその人らしく生活している姿を見る	本来いる場でその人らしく生活している姿でいられるように、その人の可能性を信じて見出していく 医療・薬剤ありきの病院では、患者の病状だけにしか注目できていなくて、ゆっくりと本人に向き合うことはできていない
意向を大切にすることがいつか実を結ぶ地道な関係づくり	本人が希望したときにいつでも SOS を出せるように、本人の意向を大切にしながら地道な関係づくりをしていく
家族の気持ちをじっくり聞くことで本人と家族の生活上の身近な存在になる	家族の身近に行くことにより安心と支えになり、本人と家族お互い距離を保ちながら生活できている 家族の話をじっくり聞いて家族が疲れていたり力が弱まっていたりする部分を補い家族のストレスが軽減していく

(3) 本プログラム評価は、病院で働く看護師が、精神障害を持つ人のリカバリーについての概念的理解とそれに基づいた支援を体験することで、日常的看護援助にリカバリーの概念を浸透させる有効性を示したと考える。現在、米国では、急性期看護における精神保健看護師を対象とした、リカバリー志向の実践の教育方法の開発と実現に向け、5 年計画が進行中である。その現状分析によると、病院看護師はもっとリカバリーについて学び、実践し、日常的看護援助の中にリカバリーの概念を浸透させ、精神障害を持つ人とパートナーシップ形成を継続しなくてはならない (American Psychiatric Nurses Association, 2011) とある。ところが看護師は、リカバリー志向の基礎教育や訓練を受けた経験が少ない (Cleary, Horsfall, O'Hara-Aarons, et.al., 2013)。また、個々の看護師のリカバリーの知識と教育は、看護師が働く病院などの施設環境のリカバリー志向性と関連する (McLoughlin, Wick, Collazzi, et.al., 2013) ことが指摘されている。わが国では、病院で働く看護師のリカバリー志向の実態、リカバリー志向の教育と実践などについては明らかにされていない。しかし、本プログラムでは、参加者による休日の時間を利用した主体的な取り組みの中で、地域に出向き、ACT の見学実習と、体験を記述してグループワークの終了まで継続的に応じられたことでは、看護師のリカバリーへの関心の高さも伺えた。

(4) 本研究の限界について述べる。一つは、サンプルサイズが小さいことである。当初プログ

ラムの参加者は12人であった。サンプルサイズが小さいことは、分析結果の偏りを否定することはできないであろう。次に、プログラムの横断的評価を実施できなかったことである。これの背景には、リカバリーという概念がまだ病院の中に浸透されていないことで、看護援助に活用する実現可能性の低さが考えられる。しかしながら、重度の精神障害を持つ人の自分らしく意義ある生活を目指すリカバリーを理解するため、病院看護師を対象とした体験プログラムを実施し、定量的かつ定性的に評価した研究はこれまでない。この点における本研究の意義を強調したい。今後、一人でも多くの看護師の参加意欲を高められるように、体験プログラム実施において病院の一施設ごとに企画・運営することや、体験型の良さを残しつつ重点的に学べるプログラム構成を検討していく。三つ目は、プログラム評価指標においてRKIとRAQ-7の結果の差異が生じたことである。これについては、リカバリーの概念を活用した基礎教育や地域の中での活動経験などによる比較研究を蓄積し、対象の属性に合った評価指標としての信頼性と妥当性を検討していく。以上のことを含み、対象数を増やして長期的な評価研究の実施を今後の課題とする。

<引用・参考文献>

- Mishina K. Comprehensive Support for Community Life for Persons with Serious Mental Disorders: Ideas and Skills for Outreach Activities (1), 45–59. Gakujuitsu Shuppankai, Tokyo, 2013
- Chiba R., Umeda M., Miyamoto Y., et al. An Examination of the Validity and Reliability of the Japanese Version of the 7-Item Recovery Knowledge Inventory for Mental Health Professionals, Japanese Society of Public Health's Collection Conference Summaries, 71, 445. 2012
- Chiba R., Miyamoto Y., Yamaguchi S. An Examination of the Validity and Reliability of the Japanese Version of the 7-Item Recovery Attitude Questionnaire (RAQ-7) using Mental Health Professionals as the Subject, Conference presentation at the Japanese Association of Psychiatric Rehabilitation, 2012. Unpublished manuscript.
- Recovery to Practice Weekly Highlight. (2011). American Psychiatric Nurses Association; APNA. The state of psychiatric-mental health nursing in the recovery to practice journey: A situational analysis, July 7, 25(2). U.S. DEPARTMENT OF HEALTH AND HUMAN SERVICES, Substance Abuse & Mental Health Services Administration.
- Cleary M., Horsfall J., O'Hara-Aarons M., et al. : Mental health nurses' views of recovery within an acute setting, International Journal of Mental Health Nursing, 22, 205-212, 2013
- McLoughlin K.A., Wick A.D., Collazzi C. M., et al. : Recovery-Oriented Practices of Psychiatric-Mental Health Nursing Staff in an Acute Hospital Setting, Journal of the American Nurses Association, 19(3), 152-159, 2013

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Aki Okamoto, Shizuko Tanigaki	4. 巻 28
2. 論文標題 Evaluation of an experience-based program to understand the concept of recovery among hospital-based psychiatric nurses	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of Human Behavior in the Social Environment	6. 最初と最後の頁 77-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/10911359.2017.1349014	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 岡本亜紀、谷垣静子
2. 発表標題 精神科病院で働く看護師の包括型地域生活支援プログラムへの関心
3. 学会等名 第38回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Aki Okamoto, Shizuko Tanigaki
2. 発表標題 Experience of Hospital Nurses on Observational Practice during Assertive Community Treatment Visits to Patients with Severe Psychiatric Disabilities
3. 学会等名 TNMC&WANS International Nursing Research Conference 2017（国際学会）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----